高木正三（ドリーム編集長）

営林署に電話は一つ

チェンマイに赴任した時、プロジェクト事務所は建設中であり、我々専門家はチェンマイ営林署の会議室に仮住まいであった。会議室といってもウナギの寝床みたいに狭く、うす暗く、ここで目の悪くなった専門家もいた。

営林署には電話は一つしかなくのどかなものである。もちろん我々専用の電話があるわけではない。電話は営林署長室の隣に公衆電話みたいに置いてある。

営林署の職員が「日本人の方、電話ですよー」と呼びに来るとその度にドキドキした。「業務調整」という庶務係、経理係、渉外係、その他雑用係の私の立場上、私が電話にでなければならない。受話器を握り日本語であればホッとする。タイ人だと、例え英語の電話でも、この頃の自分の語学力の乏しさにっ加え、ジージージーと雑音がして聞き取れない電話に閉口した。

通じない電話

チェンマイに来てわずか20日余りでバンコクに出張することになった。距離的にいえば、東京～広島、東京～青森・岩手の感じで約 700 ㎞である。いわば20日前岩手に住みこんできた外国人が東京に出張するみたいなものである。

他の専門家。の船便で送った荷物も受け取ることができるという知らせがったので、少しでも早く引き取ろうと、飛行場の公衆電話から運送屋に連絡することとなった。さて、公衆電話の受話器を持ち上げコインの投下口に 1 バーツ（約６円）を入れようとした。ところが困ったことにこの１バーツが入らない。確かに公衆電話使用料は１バーツだと聞いていたはずだし、そのコインを見た。タイ語の変な字で１バーツと書いてある。公衆電話の横や裏を調べたり、受話器を強く押したり引いたり、ガチャガチャやったり色々なことを試みる。やっぱり駄目だ！この機械は故障していると勝手に解釈し、隣で使っている人の後に並び改めて使用することにした。ところがこの機械も１バーツが入らない。不思議な顔で不思議な対応をしていると、飛行場の前で客引きをしている白タクの運チャンがニヤニヤしてタイ語で話しかけてくる。「これは危ない！俺を東北の田舎者と思い、東京の運チャンは何か騙すつもりだなぁ」と心の中で呟き、初めて覚えたタイ語を使う。「マイペンライ・マイペンライ」（気にしな

いで、どうか気にしないで下さい）。

彼は１バーツを取り出し何か説明する。私は「マイペンライ」。遂に彼は自分の持っていたコインを隣の電話機に投入し「さぁー使え！」と言わんばかりに自慢顔である。結局、その原因は簡単なことであった。１バーツのコインにも大・小２種類のコインがあり、私は古い方の大きなコインをしようとしていたのである。タイ人の過剰なほどの親切心には驚き、心の底からアリガトウと感謝。

そちらはどこですか？

タイ国では電話をかける時、決して自分の名前はなのらず「そちらはどこですか？」と必ず問いかけてくる。リンリンリーン！受話器を取ると例の調子でさも当然に「そちらはどこですか？」と聞いてくる。こんな常識知らずは許せず！と思いこちらの名前を名乗ることなく「あんたは誰だ？」と問い返す。相手は変に思い「そちらはどこですか？」と又聞いてくる。こちらも「あんたは誰だ！」と怒鳴る。相手は『変な外人が出たゾ。混戦しているのかなぁ』と思い電話を切る。２～30 秒もすると再び電話がかかり「そちらはどこですか？」とやり始める。日本のイタズラ電話と同じである。主人の変な電話対応に驚いたメイドが飛んできて電話を替わり一件落着となる。

当初は不愉快であったが、タイの生活に慣れタイ人と話したり、タイに関する本を読むとこの意味が分かってくる。この国では雨期になると度々洪水となり、その度に電話線が混線する。混線すると、自分がかけようとする所に必ず繋がるという保証はない。全然知らない人の所に繋がることが度々ある。そのために、本当に繋がっているか否か確認のために「そちらはどこですか？」と問いかける訳である。このように説明されれば、なる程その合理性に納得できる。日本であれば混線など無いので理解しにくい。

このような生活に慣れ帰国した後、職場でこちらから電話しておきながら「そちらはどこですか？」と尋ねると、周囲の人は私を見て、やっぱり「南方ボケ」と思うのかなぁ？

平成 25 年ゴルフツアーでチェンマイを訪れた時、どこでも誰でも携帯電話を使っていた。借り上げのミニバス運転手を呼び出すのを通りがかりのタイ人に依頼した。親切なタイ人は自慢げに携帯電話を取り出し、例のかん高い声で呼

び出してくれた。